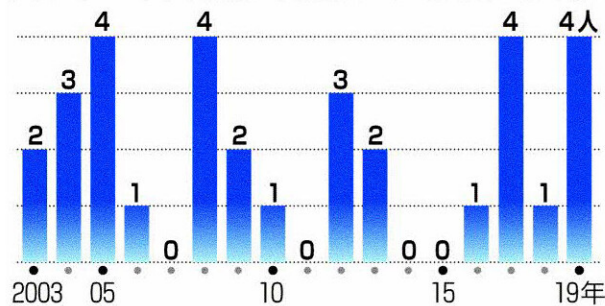




「看護学研究科に通っている。」「看護スタッフの一員としてスキルアップを図り、より良いチーム医療の実現を目指したい」と話す。

医療最前線 令和を担う 県立中央病院から

(184)

山梨県立中央病院の黒田達也看護師(38)は集中治療室で働く傍ら、急性重症患者看護の専門看護師を目指し、山梨県立天大学院看

集中治療室では、容体が急変するなどして危機的な状況にある患者を24時間体制で管理し、治療する。人工呼吸器や点滴、ペースメーカー、透析装置など医療機器に

集中治療室・黒田達也看護師

専門資格めざし学業と両立

る」

よる処置や治療も多く、看護師として機器を適切に管理し、患者の呼吸や心拍、血圧などを細かくチェック。表情などから患者のニーズをくみ取り、人工呼吸中の苦痛を和らげるため鎮静剤の量の調整をしたり、たん吸引をして合併症予防に当たったりしている。

集中治療室に勤務して5年。医

志した。特に専門看護師は各職種をつなぎ、患者とその家族と医療者との橋渡しを中心的に行う重要な役割を担う。「チーム医療の質の向上に貢献できればいい」と話す。同病院看護局は職員の学びを支援していて、本年度は黒田看護師を含め4人が大学院に入学した。4月から週2日ほどのペースで通

学。大学の協力を得て効率よく受講できる時間割を組み、講義のある日は仕事を休みや夜勤にしてもらうなど、仕事と学業を両立している。「勤務の間を縫って課題をこなしたり。大変ではあるが、働きたがら学んだことをすぐに職場で生かせるメリットもある」

集中治療室では、患者本人とコミュニケーションを取るのが難しい。人工呼吸器をつけるか、心臓マッサージをするか。本人に代わり家族が、死生観にもかかわる治療方針の選択を迫られることもある。家族自身も混乱の中にあるため、精神的なケアや意思決定を支援するの看護士役割だが、「家族と接して思いをくみ取るときも学問的な裏付けを持つ看護の実践ができる」と手応えを感じる。

くろだ・たつやさん 東京、群馬で准看護師、看護師として経験を積み、2013年4月から山梨県立中央病院勤務。群馬県桐生市出身。38歳。趣味は旅行、買い物など。

会社員を経て看護師になった。患者を間近で支える看護師の仕事にやりがいを感じる一方、「まだ奥が深い」とも感じている。「目の前の患者さんにもっと何かしてあげられないか。全人的な看護を追求したい」。今、働きながら学ぶ意義を感じている。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します